

舞台は1980年6月の東京。あの頃、自分は何をしてきたのか。青春期だった中高年は、遠い目で回想するだろう。平成生まれには、メールやスマホがない時代のおどろき話と映るかもしれない。

本作は1959年生まれの子大生モデル、由利を視点人物とした「物語」と、当時流行した音楽やブランド品な

文学周遊

どに付いた442項目のスナップな「注」で構成される。登場人物の振る舞いや、あの時代の精神風土に対し、時に「作家」注釈が、辛辣な批評を加える。こんな小説、誰も見たことがなかった。例えば、由利が着る「ポーロの山積みでアーア」雑誌「ポパイ」や「ポット

608

「あれを着れば何か抜けるかも」などと誤信。行列に並んだ過去を持つ、今や定年階級のお父さんもいるはずだ。作品の末尾に、何の脈絡もないように見えるデータが添付される。1979年の合計特殊出生率「1.77」だ。「出生率の低下は今後も続くが、80年代は上昇に転ずる可能性がある」という国の審議会の楽観的な予測とともに。作家は、自ら「クリスタル」

あと十年たったら、私はどうなっているんだろう

と命名した平和と繁栄の80年代の光輝のその先に、現在の荒蕪たる少子高齢化社会を幻視したのか。刊行当時、「軽薄だ」とくさされた大人も、絶賛した批評家も、この作品の意匠には気づかなかった。

物語は、テニス同好会の練習で由利が、表参道を原宿駅に向かって駆け抜ける場面で結ばれる。辺りをぞろぞろ歩けば、街の象徴だった同潤会アパート、セントラルアパートはすでにない。由利の友人が住む門限が厳しい女子学生会館は、セコムの本社ビルだ。プルーストの「失われた時を求めて」の語り手は、紅茶に浸したマドレーヌの風味をきっかけに、過去の記憶を蘇生させる。竹下通りのクレイプ店のどきつい匂いを吸い込むと、80年代から流れた時間の断片が無秩序に浮かび、目まがいそう。

(編集委員 和歌山章彦)



昼下がりの表参道。慌ただしく人々が交差点を行き過ぎる—斎藤一美撮影

夕刊文化

遠みち・近みち

編集委員 中沢義則

どう生きるべきか。この問いは思考の深遠はともかく、人が考え続けてきたことだろう。人間の専売特許だった「考える領域」に人工知能(AI)が参入し始めている。

そんな時代にどう生きるのか何だか気にはなっていた。21日、東京・丸の内「AI×ゴリラ×仏教」人間とは何か」と題するシンポジウムがあった。真宗大谷派(東本願寺)真宗会館が主催する親

AI使いこなすのは人間だ

織フオーラムだった。パネリストは霊長類学者で京大総長の山極寿一、駒沢大学准教授でAIに詳しい井上智洋、宗教学者で大谷大学学長の本越康の3氏。AIに無知な私にも面白かった。

AIの進化で日々の生活はどうなるのか。汎用AIの研究開発が進み、2030年に実用化が始まる可能性があるらしい。碁将棋など特定の機能を持つ特化型と違い、いろいろなことをこなせる。井上氏は「やがて人間がす

田中康夫「なんとなく、クリスタル」

東京・表参道



(注)●は今はない施設



たなか・やすお(1956) 東京都生まれ。一橋大学在学中の80年、デビュー作「なんとなく、クリスタル」で文芸賞を受賞。モデルで月40万円を稼ぐ女子大生の由利と、大学生のバンドマンの恋模様を軸に、若者の消費行動を含む同時代の気分

(作品の引用は河出文庫)

れない」と予測する。仕事に追われずに好きなことができる楽園なのか、人間の同士の生のつながりまでAIが代行する孤独な世界か。見知らぬ人も自由につながるSNSはその予兆だろう。木越氏は「AI時代の未来を見据えて宗教や仏教をきちんと位置づけ、人間の心の悩みにどう向き合うのか考えなければいけない」と述べた。

AIを巡る議論で浮かび上がったのは人間の素晴らしさだ。山極氏は人類が進化したのは食料などを分かち合う信頼のシステムを構築したからだと言っ。井上氏は人と接しなくて済むAI歓迎の声がある一方、密な付き合いを求める若者が増えていると話す。木越氏は「人間には内面を見つめ、利己的な自分を悲しむ力がある」と言う。AIが格段に進化しても、使いこなすのは知と情を持った人間だ。

文学周遊の取材で訪ねた風景の写真特集を電子版に掲載しています。
(http://www.nikkei.com/photo/)